義太夫

義太夫協会会報
第80号
平成17年1月1日
社団法人　義太夫協会発行
〒104-0061 東京都中央区銀座
4-13-11　文明堂3F
TEL・FAX(3541)5471
http://www.gidayu.or.jp

竹本摂津大掾（たけもとせっつのだいじょう）の芸談（げいだん）

社団法人義太夫協会会長
景山正隆

今から百年前、日露戦争の勃発した明治三十七年二月に、水谷不倒著『竹本摂津大掾』が博文館から刊行されたことを知る人は意外に少ないかも知れない。本書は、菊版、活版印刷の和綴。文語体の本文二一〇頁。他に緒言、凡例、目次、摂津大掾自画讃を含む六葉の写真から成る。定価四〇銭。私が昭和五十七年に本書を神田の古書店で入手した時の値段は六千円であった。内容は、明治から大正にかけて義太夫界の不世出の名人といわれた竹本摂津大掾の伝記である。

著者の水谷不倒（弓彦）は、『絵入浄瑠璃史』の著者として、また「続帝国文庫」の浄瑠璃、脚本類の翻刻・校訂者としても知られる、近世文学研究の先達である。

『竹本摂津大掾』刊行当時、摂津大掾は数え年七十歳で在世しており、記述内容は明治三十六年までとなっているが、本書は、著者が大掾の語る浄瑠璃に耳を傾け、面談を重ねた上、諸資料に基づいて記述されており、幕末から明治にかけての人形浄瑠璃界の動向の中に、摂津大掾を位置づけて浮き彫りにしている名著である。

私がここで紹介したいのは、本書の全貌ではなく、摂津大掾の芸談を書き留めた一節の中の摂津大掾の言葉である。大掾の芸談に触れるのは、引用の芸談のみ口語体で書留められた「彼れの芸談」と題する僅か十頁足らずの一節だけである。ここでは私の胸を突き刺した冒頭の部分のみを、引用することにしたい。（読みやすくするために一部表記を改めた）

「誰でもよくいうことですが、すべて芸道は昔から見ますと、浮気な風になりました。第一修業が昔とは違います。」

この芸談の中で、特に私の胸を突き刺したのは「第一修業が昔とは違います」という一言である。『竹本摂津大掾』が刊行された百年前は、二十一世紀を生きる私たちにとっては「昔」である。現今の義太夫節の稽古・修業が決して生易しいものとは思わないが、それでも摂津大掾が活躍した百年前の義太夫節の稽古・修業は、現代とは比較にならないほど、厳しかったのではないかと想像するのが普通であろう。ところが、摂津大掾から見ると、明治三十年代の頃の義太夫節の稽古は「第一修業が昔とは」違うというのである。

摂津大掾は天保七年（一八三六）生まれであるから、「昔」とは本人の記憶にある「昔」で、主として幼少年期の修業時代に当たる幕末の頃を指しているのであろう。明治の人から見て、幕末期の稽古・修業は、私達現代人の想像を絶する程厳しかったのである。

著者の水谷不倒は「摂津大掾の今日あるを見て、単に天性の美音に帰するは誤れり。（中略）今日の大成は其声の美に修業の功を積みたる結果」に外ならず、今はそうした大修業を積む者が殆どなく、名人上手の出ない所以であると述べている。

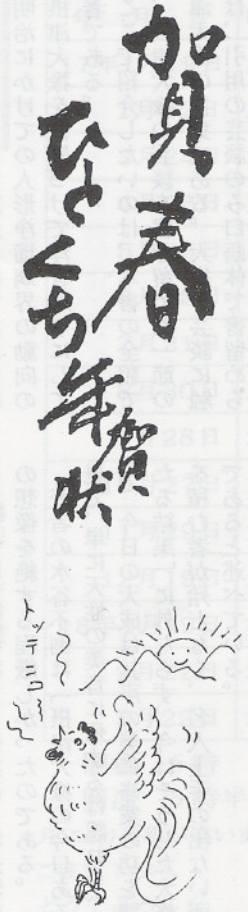
明けまして おめでとうございます

景山正隆

二十一世紀を迎えて早くも四年目を迎えました。昨年度もわが義太夫協会は、予定された各事業を無事に済ませることが出来ました。これも正会員の皆さんの努力・精進によることは言うまでもありませんが、賛助会員、特別会員の方々のご支援があればこそで、あらためて厚くお礼を申し上げると共に、今後一層のお力添えを賜りたく宜しくお願いする次第です。

昨年は、大過はなかったものの、例年開いている義太夫教室の受講者が、例年に比べて減少しました。これにはやむを得ない事情もありましたが、本年度は、少しでも多くの市民の方々に受講していただけるような配慮をしなければならないと思います。

その他、昨年の新年の会報に記した課題（賛助会員の集い・男性正会員の問題）も持ち越しとなりました。本年は、例月の女流義太夫演奏会のさらなる充実化を図ると共に、この課題を推進することも大きな課題かと思います。また、次代の義太夫を担う後継者の育成についても、子供義太夫教室など、具体的に取り組むべき課題も控えています。会員一同一致協力して臨みたいと思います。



○日々新たに、東天紅！　葵太夫

○迎春。まづは今年の命を大切に、花ある夢をいつくしみ育ててゆきたいものと念願して居ります。　朝重

○今年は「女流義太夫」の名が、世に出てより55年。いつも客席が一杯になるよう頑張ってください。　綾太夫

○新年おめでとうございます。皆様と共に義太夫を勉強したりおききいただける無事な一年であります様に。　綾之助

○父に続いて母が還暦を迎えます。親孝行の年第二弾にしたいものです。　賀寿

○おめでとうございます。今年はもっと余裕をもって、舞台をつとめたいと思います。　寛也

○皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。酉年なので、大いにはりきって参ります。　喜恵博

○二〇〇五年新年おめでとうございます。今年も頑張れるよう皆様のご健康をお祈りします。災害のない年を祈ります。　清太夫

○今年は私も年女です。ケガしてからひっこんでますが、ボチボチやってます。皆さんもお元気で。　源平

○天災や人災の目まぐるしい年も過ぎ、今年こそ、心優しく、穏やかな年になります事を心からお祈り致します。　幸治

○今年は何の年でしょう？　そうです、「日本におけるドイツ年」です！（だから、何だっつーの）　越京

○改めて義太夫は、健全な心身に宿ることを悟りました。従って無理なダイエットはとりやめます。誠に都合のよい解釈です。今年も何卒よろしくお願い致します。　越孝

○まだまだ、がんばるつもり。どうぞよろしく。　越道

○今年は良い年になりますように！　いつも初心を忘れず良心を持って浄瑠璃を語れますように。　越若

○三年目に突入です。時の流れに、流されず、置いていかれずに、がんばりたいと思います。　駒清

○昨年は、会社から有功表彰されました。三味線でも有功表彰されるよう、がんばります。　駒治

○新年を無事に迎えられた事を心より感謝し皆様のご多幸をお祈り申し上げます。　駒輝

○初心忘るべからずを座右の銘に、今年も一年大切に過ごして参りたいと存じます。　駒之助

○毎年テーマを決めて義太夫以外の演奏会に足を運ぶようにしています。箏・能・長唄に次ぎ、今は雅楽？　三寿々

○昨年は無声映画の世界に自己責任で新規参入してサプライズの連続でしたがチョー気持ちよかったです。何事も最後は気合いだーってことで今年もよろしくお願いします。　慎治

○謹賀新年。色とりどりの簪さしてとおりにでればおっとりしたおどりの師匠財布とられて取り込み中。大捕物にて無事受け取りめでたしめでたし。今年も宜しく。　津賀榮

○昨年はお蔭様でいい稽古場もみつかり、一同無事にすごすことができました。今年もよい年でありますよう。　津賀寿

○息子は春からピッカピッカの小学一年生。私も初心にもどってがんばります！　津賀花

○昨年も無事に過ごすことができました。この幸せに感謝しつつ、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。　津賀佑

○コンドルの様に雄大に鷺の如く雅に、舞い上りたいと思います。本年もよろしくおねがい申し上げます。　土佐恵

○新年おめでとうございます。巡る月日が増増早く感じられます。一日の大事さを改めて思い、良い年でありますように。　土佐子

○あけましてお芽出とうございます。台風地震去れ〳〵と声高らかにコケッコーとうたっています。頑張ります。本年も宜しく。　友路

○新年おめでとうございます。本年も御指導御鞭撻をどうぞよろしくお願い致します。皆様にとっても良い年になりますように。　幹太夫

○得心したいです。　道太夫

○協会法人化35年。保存会設立25年。この区切の年にあたり、私もこの辺でしゃき～んとしないと。　素丸

○「音に心を！心に夢を！」今年もたくさんの笑顔に出会える様頑張ります。本年もよろしくお願いいたします。　紋榮

○今年から再び、舞台をつとめさせていただくことになりました。頑張ってまいります。　弥栄

○あけましておめでとうございます。今年こそ健康診断をしなければ――それにはお医者さんを探さねばと思っています。　弥吉

○新年お目出度うございます。昨年は災害多い一年。いやな年はさる、平穏でよい年をとり込みたいものですね。　弥乃太夫

○日々の積み重ねを大切に、今年も一生懸命勉強して参りたいと思います。よろしく御指導をお願い致します。　佳之助

○今年は年オンナです。三十六歳になる予定です……？　柴田良子

＊ひと口　風水メモ

二〇〇五年は、「木」の気を持つ四緑中宮年―さまざまな「出会い」に恵まれる運気を持った年で、動くことから運気が生じる時なので、旅行に出たり、環境を少しでも変えてみたりすると良いそうです。

単にラッキーカラーの、オレンジとミントグリーンを身に付けるだけでも、気が生じやすくなり、良い縁が舞い込むとか。自分にとって必要な人、又必要な運と出会い、今よりもっと幸せになりましょう。

皆様の御多幸と御健康を心よりお祈り申し上げます。

正会員 TOPICS

台湾紀行

台北市の招聘を受け、第六期アートフェスティバルの為、乙女文楽ひとみ座に同行しました。この催しは、台北市築城百二十周年と合わせ、十月中一ケ月かけての盛大な企画でした。テーマは「新しい都市から、古風な内面の発見」。

一行は十二人。ひとみ座制作担当の松澤文子さん、舞台の友松正人さん、照明の後藤義夫さん。そして舞台は…

傾城阿波の鳴門
［お弓］伴通子・［お鶴］篠崎早苗駒輝・三寿々

戻り橋
［渡辺綱］村上よし子・［若菜］吉澤亜由美
駒之助（若菜）駒輝（綱）
津賀寿・三寿々

十月十一日、成田を発ち、四時間かけて夕日の沈みかかった台北空港に到着。何やら、一昔前の日本の風景？のような街並みを眺めながら、宿泊先である師範大学の施設に着きました。

翌十二日は、朝九時から舞台となる中山堂でセッティング。義太夫組は午後入り。かつて日本統治時代に建てられた、立派な劇場です。舞台も人形に対してかなり広い間口、床は舞台外に充分なスペースを取って設定されました。出来るだけ、人形浄瑠璃の舞台形式に近い形で観ていただくというひとみ座さんの配慮でした。台湾時間というのは、ゆっくりペース。しかも食事休憩を一斉に十二時～一時、五時～六時、きっちり取るのです。ようやくリハにかかったのは、午後七時過ぎ。九時過ぎに終わって、その夜は屋台で有名な夜市に繰り出しました。

十三日と十四日。いよいよ本番の舞台は午後七時開演です。

六時半には開場となりますが、十五分程して、よし子さんが「三十人しか入ってないの～」と飛び込んできて、一同「ええっ～」。しかし、上演前には二百人近いお客さんが集まり、熱心に観劇していました。今回の公演は、舞台両脇に字幕スーパーがついていました。

視覚的に動きのある戻り橋は、迫力ある人形の動きが大受けでした。又、ミュージシャン（床）の鬼女の変貌ぶりも大いに気に入られたようです。台湾では、開幕前のベルがありません。場内の明かりを二、三回ゆっくり落としたり点けたりするのが合図です。客席は中央に1番があり、下手へ奇数（3、5、7…）上手へ偶数（2、4、6…）と並んでいるのも面白い発見でした。

ひとみ座さんは、午後のひと時野外舞台でのワークショップ。学生の積極的な参加で大いに盛り上がりました。我々義太夫組は、本番までの時間、舞台に備えて体力を温存するのはもちろんですが、ガイドブックを読破している津賀寿さんの先導で、「ここは」という名所をほぼ網羅したと思います。蔣介石、孫文、世界一高い１０１ビル、龍山寺…。最後の一日は一行担当のシンさん（日本語堪能で日本ドラマ通）の案内で、故宮博物院と、烏龍茶の泌園へ。充実した旅でした。

（駒輝）

― 新浄瑠璃「百鬼丸」―

手塚治虫の漫画「どろろ」を原作とする舞台「新浄瑠璃　百鬼丸」の公演が6月16日～23日、新宿の紀伊国屋ホールにて行われました。

スーパー歌舞伎等でもおなじみの劇作家横内謙介氏が主宰する劇団「扉座」による上演で、新聞に掲載された劇評の効果もあってか日程後半は劇団側が嬉しい悲鳴を上げるほどの大入り、好評のうちに幕を閉じました。

物語は、天下統一を望む武将醍醐景光が、自分の野望を叶えてくれるならやがて生まれてくる子を捧げよう、と魔物たちと取引きする場面から始まります。父によるこの取引きのため、間もなく誕生した百鬼丸には生まれ落ちたその瞬間から身体の48の部分が欠けてしまっていました。幼い盗賊どろろを供とし、百鬼丸は失われた自分の身体を取り戻すために、魔物たちと戦いながら旅を続けます。原作では、不吉な子として捨てられた百鬼丸を引取って育てあげた医師が身体の足りない部分を補ってくれたので、百鬼丸は少年の姿をしています。今回の舞台では百鬼丸は生まれた時のまま、目鼻も手足もなく血も流れていない赤ん坊の姿のまま生きながらえてきたという設定で、百鬼丸の影と声をそれぞれ黒衣をまとった男優と女優が演じました。

また、原作ではこどもであった盗賊どろろは、戦乱で妻子を失った青年として描かれています。

この作品を上演するにあたり、横内氏は劇中に義太夫をとり入れたいと考えられ、作曲を竹本葵太夫さんに依頼されました。

この作品は、山椒大夫とか、小栗判官みたいな説経節のように扱えないかと発想して義太夫を取り入れたんです。

今回、浄瑠璃を作曲してくださった葵太夫にどろろの原作を読んでもらったら、彼もまさにそうだとおっしゃってくださってそのアイデアにのってくれた。

（「新浄瑠璃　百鬼丸　公式パンフレット」より引用）

当初は劇場で生演奏を、という計画だったのが、葵太夫さんのスケジュールの都合等で不可能となり、結局葵太夫さんと鶴澤慎治さんによる演奏の録音を用いての上演となりました。

義太夫を使ったいちばんの見せ場は母子の別れの場面でしょう。夫から殺してしまえと言われた百鬼丸をなんとか秘かに逃がしてやろうと、母は生まれたばかりの我が子を守り刀と共に盥に乗せ、川に流す――まさに歌舞伎の舞台に出てきそうな情景です。捧げ持たれたいくつもの灯籠が川の流れとなって母と子を隔て、義太夫の調べに乗って母の歎きは果てしなく続く――現代劇なのに義太夫によく調和している、というようなレベルをはるかに超え、これ以外の演出方法が何か存在しうるだろうか？と逆に考えてしまうほどでした。また、魔物退治の場面は、いかにも時代物浄瑠璃らしい勇壮な旋律のもと魔物が次々に倒されてゆき、目にも耳にも楽しい仕上がりとなっています。

葵太夫さんが作曲の際に最も苦労されたのは歌舞伎と現代劇とのテンポの違いだそうです。普段の調子だと長すぎるだろうからとある程度予想して準備しても、まだ俳優さん達が途方に暮れるほど長い……。セリフの速度、思入れの有無、さまざまな相違点があり、ほどよい寸法に行着くまで試行錯誤の連続だったそうです。

「生の声」にこだわった横内氏の発案で、葵太夫さん指導のもと劇団員による「浄瑠璃コロス」も導入されました。ただ詞章を「読む」だけでなく義太夫的表現を取入れての合唱は、舞台の緊張感を高める上で非常に効果的だったと思われます。

現代劇、歌舞伎、義太夫節、漫画、多くの観点から興味の尽きないこの作品、再演が待たれるところです。

○保存会25周年総会
7月31日、保存会25周年総会が保存会会長、越道師を含め10名出席して開催されました。

○国内研修生
義太夫節保存会員の指導を受け鶴澤駒清が今年度の国内研修生として稽古に励んでおり、1月28日と3月29日にお江戸日本橋亭で発表会を開きます。研修によりどう成長していくかを見守って頂きたいと存じます。

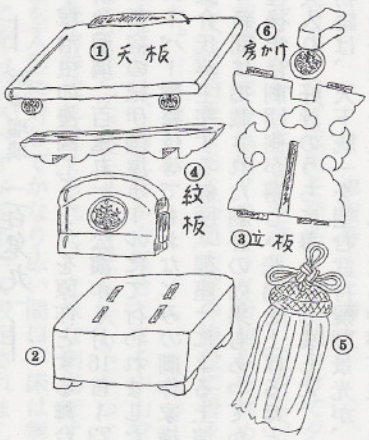
お役立ち情報

見台について

義太夫演奏に欠かすことのできない道具の一つ、見台。太夫が語る際に床本をのせ、また力の入るところでは思わずつかんだり、たたいたりすることもあります。義太夫節の進化とともに、少しずつ変化を遂げ、現在の形は、重厚な語りと太棹の音に見合うだけの、立派なものとなっています。

ではここで義太夫節の見台の構造を細かくご紹介します。

ご存知の方も多いと思いますが、この見台は組み立て式になっており、分解して箱に収納することができます。戦前までは、巡業で地方へ行くときなどは、弟子が背中に担いで運んだそうですが、現在は宅配便におまかせしています。



各部分の名称は左記の通りです。

①天　板（てんいた）
②　胴　（どう）
③立　板（たていた）
④紋　板（もんいた）
⑤　房　（ふさ）
⑥房掛け（ふさかけ）

現在使われている見台を見比べてみると、それぞれ少しずつ形や大きさが違っていますが、これは正式な規格がない為で、材質、大きさ、木の厚さ、模様、細工等、作る人（注文する人）の好みが多分に取り入れられているようです。よって、特にお金をかけたものは、豪華な蒔絵や螺鈿が入り、金具にも細かい装飾が施されています。

色に関しては、ほとんどが黒の漆塗りですが、他に朱、梨地（金色っぽくざらざらした手触りのもの）、白木（桐や欅の木地そのままのもの）があり、演し物によって使い分けられています。

房の色に関しては特に決まりはありません。現在、最も多いのが白です。他に緑や紫、金糸、銀糸を混ぜたもの、中に朱を入れて揺れたときにちらりと見えるようにしたものなど様々なものがあります。素材は絹か木綿です。

房の結び方はあげまき結びと菊結びの２種類ありますが、あげまき結びの方が多いようです。ごくたまに見かける太くて丈の短い房は、奴房（やっこぶさ）といいます。

また、房掛けは蝶番（ちょうつがい）型のものとコの字型のものを天板にかける差し込み式のものとがありますが、総じて差し込み式のものの方が年代が古いようです。

Ⅱ見台の歴史

ここからは現在の形にいたるまでの見台の歴史をたどってみます。

現在、絵番付や肖像画などから確認できる見台を年代順に見ていくと、少しずつ形が変化してきているのがわかります。

まず一六八〇年前後の図に描かれている見台は、単に台に木を一本立て、譜面台を乗せただけの単純なものです。この頃は、太夫と三味線は人形の後方で向かい合って座り、観客からは見えない位置で演奏していました。

「土佐掾座の図より・1680年前後」

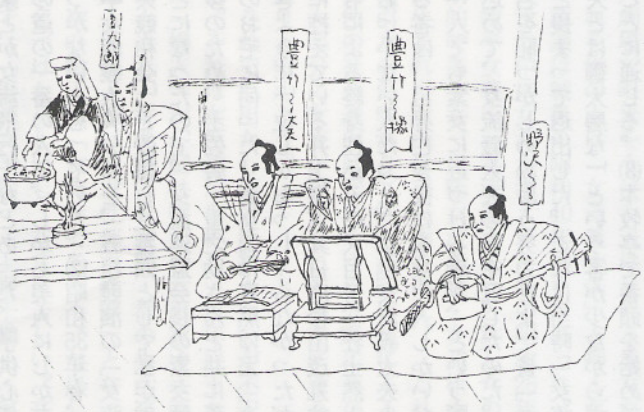
また竹本義太夫の肖像画では、箱型の見台を使用しているのがわかります。

「竹本義太夫像より」

一七〇〇年代に入ると、太夫と三味線弾きは舞台上に横に並んで座り、シンの太夫が足が二本ある立型の見台を使用し、脇は見台無しの無本というスタイルが見られます。

「牟芸古雅志挿絵『曽根崎心中』より・1703年」

また少し後の時代の図を見ますと、少し頑丈になり、猫足のような立ち型の見台と、脇は箱型のものを併用しているのがわかります。ともに漆塗りになっているようです。



「今昔操年代記挿絵『北条時頼記』より・1726年」

この時代には舞台で出語りをしているので、少しずつ見台も観客の目を意識したものになってきているのかもしれません。

一八〇〇年代に入りますとさらに豪華になっていきます。艶容歌妓結の挿絵をみると、房のようなもの（組紐）がついているのが確認できます。胴も現在の形に近づき、土台も高くなってきています。ただし現在のものより、天板の角度が非常に急になっています。七兵衛（尻ひき）は使用していなかったのでしょうか？

「艶容歌妓結挿絵より・1817年」

その後幕末、明治以降は、ほぼ現在の形となります。山家屋見台店という見台専門店もでき、五行本で有名な加島屋などでも見台を大量に作っていたそうで、現状の見台の普及につながったようです。

《こぼれ話》

見台の値段は蒔絵の質によるところが大きいですが、現在新品を作ると百万～数百万。古道具屋で十万前後からあるようですが、やはり状態の良く上等なものは高価です。

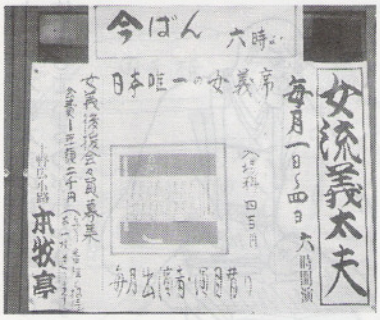
（取材協力　豊竹呂勢大夫氏）

女流義太夫の「女流」についての考察

竹本綾太夫

此度びビクター伝統文化振興財団より、四枚組ＣＤ「女流義太夫の魅力」が発売された。その解説冊子に「女流義太夫」の名称について少し触れたところ、二・三の方から「現今女流ばやりだが、義太夫もそれに便乗したものと思っていたら、なんと元祖だったのですね。詳しく知りたい」などのお便りをいただいた。そこで昨年春に少し調べたことと、私の体験を基に考えてみることにした。

先ず辞典類の「女流」を牽くと〝女の仲間、女の一派〟・〝文学・芸術に携わる女性〟・〝女性のこと〟などとある。次に「女流」という字を、じっと睨んでみた。すると(イ)「女の流れ」とみると、男流はないのでそれが本流で、女流は支流だろう。(ロ)「女の第一流の人」とみる。(ハ)返して「流れの女」とみると、これは遊女のことだ。他に「女の上流の人」なども浮かんでくる。次いで私の体験を……。



本牧亭入口の表看板毎月書いて掲示した。入場料400円とあるので昭和40年代中頃。

(1)昭和16年8才頃、家にあった写真誌に「女流集」があり、15人位の中で今でも鮮明に覚えているのが、女流歌人の九條武子、舞踊家の林きむ子（竹本素行の娘）、新舞踊家の崔承喜、そして女流義太夫は竹本素女、他に作家とか女流飛行士などあった。子供心に、その道の一番の人で、しかも美人にしか女流はつかないと思っていた。(2)昭和35年春、本牧亭女流義太夫公演を、五組競演の「女流義太夫競和会」と改組し、番頭として私が就くことになったので、女流連盟会長の素女師に挨拶のため、土佐廣・重之助さんと共に芝巴町のお宅に伺った。素女師は寡黙ゆえ「よろしきように」位しかおっしゃらなかったが、横に控えている井上老（其日庵杉山茂丸翁の命令による終身住込みの大目付、壮士然としたおっかない人だった）が「女流義太夫と呼べる者は、呂昇亡き後は素女一人しかいない。一人でも素女に近づける者が、という願いを込めて、女流義太夫の名を冠したのだ。その名を恥づかしめぬよう努力せよ」皆「ハイ」と畏まって退出した。これは当時「女流義太夫とは御大層な」という客が少なからずいたことに通じる。(3)本牧亭で番頭を始めて一寸した頃、先代馬琴・山陽・一鶴さん達が女弟子を採り、十人位になった。各新聞の演芸記者は、初めは女講釈師とかと紹介していたが、そのうちに「女流講談」で定着した。これは同じ本牧亭に女流義太夫があったからだ。少し後に将棋の世界にも女のプロが育ち、女流棋士と呼び、女流名人戦とかが新聞紙上を賑わせるようになった。(4)昭和59年「女の肖像－現代日本の女流百人」が文芸春秋から出た。義太夫に土佐廣師があったので早速求めた。あらゆる分野・業種のトップ百人。変ったものでは、女流外交官・女流登山家・女流ゴルファーなどもあって驚いた。(5)昨年10月、街のＪＴＢのツァーパンフの中に「女流香港」と「女流ソウル」を見つけた。女性のための旅だが、内容をみると、上流志向女性のための豪華な企画だ。「女性香港」より「女流香港」の方が良くみえる。

以上は概況のようなものだ。語源については、昨年4月頃、学校の後輩の竹本道太夫君に「江戸時代の浄瑠璃や人情本などは造語の宝庫だ。大近松の〝初恋〟や〝神武このかた〟などは今でも使われているが、女流はないと思う。人情本にあるかも知れないので当ってくれ。近代の小説で、私の見た限りでは、有島武郎の「或る女」に〝女流基督教徒云々〟とある。それが明治44年に発表されているが、それ以前にあるかどうか。また〝女流ナントカ〟という書物について調べてくれ」と頼んだら、直ちに都立中央図書館で調べてくれた。

「人情本なら為永春水の春色梅児誉美と思って見たらありました。遊女の洒落のようです。他には見当りません。次に女流のつく書物は何んと二百冊以上、最も古い本は〝女流文学史〟小森甚作編で明治34年。以後〝女流

歌人の研究〟・〟女流宮庭日記文学〟とか、戦前は文学書が殆んど。戦後は文学書の他、〟女流文化の世界〟・〟花開く女流芸術〟とか、変ったものでは〟女流パチプロ〟なんてのがありました」との事。そして5月は南座出演のため京都へ行った。毎日寄る喫茶店の常連であるK女史（元京女文学部教授、80才、超博識の女権論者）に質問した。「ナニ女流？今度五阡円札になる人の日記に出てる。囲りの男文士や批評家共が勝手に女流とつけたのが分る。貧乏の極みの人がお札にね」

成程、と東京に帰ってから道太夫君と図書館に行って「一葉全集」日記編を見たら、明治28年10月に「十三夜の批評に〟女流中並ぶ者なし〟などあって心苦しくも有かな」とあり、共々に心嬉しく有かな、になったのである。明治20年代は婦人矯風会（婦人の手で社会の悪風を矯正せんとして設立された）が盛んになった頃なので、婦人作家などとつけそうだが、男の方は敵視されていると思い、女流としたのであろうか。尚「女性」は、昔は「ニョショウ」と読んだが、文法用語の男性「ダンセイ」・女性「ジョセイ」が廣まり、定着したのは明治末といわれる。

以上を踏まえて、私なりに整理すると㈠文化文政期（一八一〇年頃）の人情本などに現われるが、立消えとなる㈡明治25年頃より、女流作家・女流文学が現われ、30年頃に定着した。これは百年以上の現在も続いている太い柱だ。㈢明治末頃より、文学関係でない集団（基督教徒など）や特殊な人（女流飛行士など）更に芸術芸能に及んだ。㈣大正中頃より、集団の意も少し残ったが、その道のトップの人、個人を指すようになった。義太夫でいえば、庶民は元より、貴顕紳士淑女が集う大劇場で喝采をうけた人は呂昇と素女だが、それを世の人は「女流義太夫」と呼んだ。この認識は戦後の昭和40年頃まであった。㈤戦後世の中に女流が消えてた頃の昭和26年に、本牧亭女義を「女流義太夫」と称したのは画期的であった。以後女流講談・女流棋士などが生まれ、女流は市民権を得た。（これは我田引水の気味あり）㈥昭和50年代に入ると、女性の社会進出は、あらゆる分野に及び、その大部分に女流が冠せられて現在に至る。花盛りといえよう。

これで芽出たしと筆を措きたいが不安もある。それは女性達が自称し、百年以上も続いた「婦人」が、婦は従がう女の意ゆえ差別用語とされ、看護婦は看護師、都の生活文化局婦人部婦人課は「女性部女性課」となった。

次の槍玉は「女流」であろう。なにしろ男が名づけたらしいし、非常に苦しい。文学方面では「男流文学論」（上野千鶴子・富岡多恵子ほか）や「男流歌人列伝」などが近年出て、反撃を加えている。「男流」が一般化してくれないと、「女流」は一寸危ない。

しかし我が「女流義太夫」は、一流（素女師のような）を極めんとする集団だ。幟を挙げて半世紀以上の歴史がある。誇りをもって邁進あるのみ。と偉そうなことを言って、引込むことにする。

＝特集＝その二―

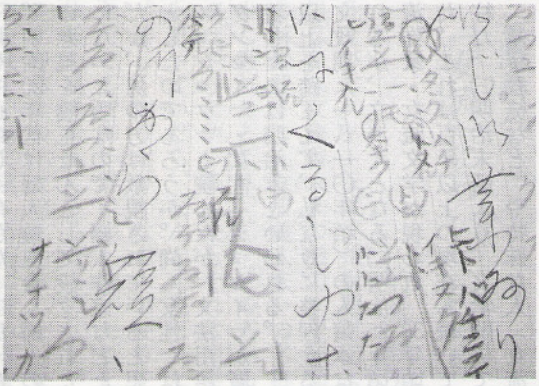
協会のお宝

『豊澤猿幸師の学習帳』

義太夫節の演奏を記録する文書手段として、「朱（しゅ）」と呼ばれる三味線の楽譜があります。いろは四十八文字でツボを規定し、傍線や点によって早さや間合いを示し、三味線の手数だけでなく、ときに太夫の語りの音階も記録されます。記譜する人の感性で書き方はまちまちで、克明な方、アバウトな方、書式も一定していません。朱を解読することを「朱を繰る」といって、専門的な知識が要求されることもあります。

昭和の女流義太夫三味線の名手として、文楽の人たちからも一目置かれた豊澤猿幸師。師の「学習帳」とも呼ぶべき朱のノートが協会に所蔵されています。勉強熱心な師は、ご自身で身につけられた演目でも、改めて文楽人に教えを乞われました。綱造・清六・喜左衛門・松之輔・彌七…。その備忘のためにまとめられたのがこのノートです。大学ノートに何段も丹念に書き込まれています。演題・教えてくださった師匠の名・詞章・朱・注意書き…。けっして見やすいとはいえない書き方ですが、ひとつひとつ解読していくと、微に入り細にわたり書き込まれている演奏情報に驚かされます。

たとえば『妹背山婦女庭訓：吉野川』の弾



「鎌倉三代記」より

き出しの「三重」。「二ノ音（オン）で云ふ事を志づみ三重と云ふ」とあり、朱章のそばには「キメ」「オサエバチツヨク」「引下ル」「ナガス」…などの注記があります。ほかにも全般にわたり、大間・ノリ間・順に早く・別・ツヨク・ヤハラカク・クセ・ネバル・ナラベル・ツヅケル・足ツケル・キザム・力入（力を入れる）・イッパイニ引ク・アシラヘ・タタク・ケシバチ・ハシリバチ・バチソロエテ・ナゲバチ・中ユビスリアゲ・クスリユビ・ユビ入ル・ウツ・中ギン…などなど。

「朱は読む人の力だけしか繰れない」と昔からいわれますが、力のある方なら、猿幸師の朱を丹念に読み解くことにより、かなり高度な演奏が再現されるかも知れません。ただいまは「録音」という便利な手段がありますが、「記譜」という手段しかなかった時代に、なんとかして教わったことを忠実に記録しておこうと、ご自身の頭脳を駆使して記入された学習帳。たんなる曲の記録を超越し、豊澤猿幸師の芸に対するひたむきな姿勢に襟をただされるお宝です。

女流義太夫録音裏話

水野悠子

二〇〇四年九月、ＣＤ集「女流義太夫の魅力」が発売された。音楽評論家・中村とうよう氏の発案により、義太夫節創設三百年にあたる一九八四年に録音、翌年早々に発売されたＬＰ集「女流義太夫・いま」のＣＤ化である。以来二十年の間に、本牧亭が閉鎖され、女流義太夫は国立劇場演芸場に移転するという大変化があり、ＬＰは廃盤になった。その後、女流義太夫のレコードは売っていないのか、と何回聞かれたことだろう。このたびの復刻はまさに御同慶の至りである。「女流義太夫・いま」の担当ディレクター・中井智恵子氏も他界された今、当時の事務局員が見た制作裏話を御披露しておきたいと思う。

収録演目は、お馴染みの「酒屋」「湊町」「巡礼歌」「寺子屋」「野崎村」。しかし、「野崎村」は初め「壷坂」の予定だったのである。朝重師（沢市）・駒之助師（お里）の掛け合いが「野崎村」のリレー演奏に変わったのは、「壷坂」に「いわゆる差別語」が出てくるからであった。中井ディレクターは、差別語とされる言葉を古典から排除するような方ではなかったが、万一クレームがつくと、せっかくの企画全体が壊れる恐れがあること、収録することは出来てもラジオ放送に使えない恐れがあることを危惧して、心ならずも自主規制されたのであった。

「酒屋」の録音日、思いもかけないことが起こった。土佐広師が、突然、舅・半兵衛の咳を抜くと言い出されたのである。お園のクドキはいい声を出さなければならない。咳のあとでは声が荒れるから、咳はやらない。レコードは後に残るものだから、どうしてもいやだとおっしゃる。土佐広師の咳は、過敏な人だったら連られて発作を起こすのではないかと思うほど、真に迫った名演である。後に残るものだからこそ、抜かしてもらいたくない。しかし、師匠の決意は固く、やむを得ずその線で進めようという雰囲気になった時、ふと思いついて、こう提案してみた。「クドキから先に録音できませんか？」

すると、一瞬の間があって「そうねぇ」という返事が返ってきた。技術的には問題ないという。かくして「酒屋」はＢ面を先に吹き込んで完成した。

このたびのＣＤ化によって、盤を裏返すことなく一段を続けて聞けるようになった。時の流れに感慨深いものがある。片面三十分が限度だったＬＰ時代ならではの思い出である。

（女流義太夫研究家・元義太夫協会事務局員）

協会の動き

'04年6月より
'04年12月まで

6月5日　第2回「たつみ会」上野広小路亭
6月21日　女流義太夫演奏会「沼津の段」他
於国立演芸場
7月1日・2日「じょぎ」公演　二日間
於上野広小路亭
7月7日　常務理事会・理事会
於銀座区民館
7月15日　女流義太夫演奏会「油屋の段」他
於国立演芸場
7月15日　平井久美正会員資格審査
於国立演芸場第2研修室
7月17日　備品部会　於本郷稽古場
7月23日　「女流義太夫の世界」出演
於江戸東京博物館ホール
7月28日　乙女文楽学校公演打合せ
於協会資料室
7月31日　義太夫節保存会総会
於アリスin歌舞伎
7月31日　義太夫教室第57期初級閉講式
於豊川稲荷文化会館
8月1・2日「ぎだゆう座」二日間
於上野広小路亭
8月21日　一日体験教室
於豊川稲荷文化会館
8月25日　編集部会　於協会資料室
8月30日　女流義太夫演奏会　若手勉強会
於国立演芸場
9月1日・2日「じょぎ」公演　二日間
於上野広小路亭
9月4日　第57期義太夫教室中級開講
於豊川稲荷文化会館
9月5日　第八回竹本駒之助の会
於紀尾井ホール
9月10日・11日　車人形公演
於きもの「川久」
9月13日～17日　乙女文楽香川県学校公演
出演　4校
9月29日　女流義太夫演奏会　四谷怪談他
於国立演芸場
10月1日・2日「ぎだゆう座」公演　二日間
於上野広小路亭
10月4日　祖先祭　於両国回向院
10月5日　日本芸術文化振興基金説明会
於駒場エミナース
10月13日・14日　乙女文楽台北芸術祭公演
於台北市中山堂
10月16日・17日　車人形公演
於波佐見町・南串山町
10月26日　女流義太夫演奏会「毛谷村」他
於国立演芸場
10月29日　「女流義太夫の会」鶴澤寛也
於ほり川
11月1日　第三十七回竹本朝重りさいたる
於東京ガスホール
11月1日・2日「じょぎ」公演　二日間
於上野広小路亭
11月1日～5日　乙女文楽高知県学校公演
於春野町東小学校・土佐町田井環境
改善センター・春野町西小学校・
伊野小学校
11月8日　編集部会　於協会資料室
11月12日　邦楽会議　於協会資料室
11月16日　「芸能花伝舎」記者発表・調印現
地見学
於センチュリーハイアット東京
淀橋第三小学校跡地
11月24日　女流義太夫演奏会「仮名手本忠臣
蔵」　於国立演芸場
11月27日　第81回大日本素義会
於鳥越神社白鳥会館
11月29日　経理部会　於弥乃太夫宅
12月1日・2日　乙女文楽中津市学校公演
於豊田小学校・南部小学校
12月1日・2日「ぎだゆう座」公演　二日間
於上野広小路亭
12月5日　乙女文楽公演
於大阪市立子ども文化センター
12月5日　八王子車人形公演
於いちょうホール
12月11日　第7回巴の会
於内幸町ホール
12月13日　経理部会　於弥乃太夫宅
12月16日　女流義太夫演奏会「仮名手本忠臣
蔵」　於国立演芸場

○竹本土佐千代師　文化庁長官表彰

数少ない九州の太夫として活躍中。表彰式は厳かに、長官から25名の受賞者ひとりひとりに賞状を読み上げて手渡しされました。その緊張感はご本人いわく（両手の指で輪を作り最大限に拡げて）「太か棒ば飲み込んだごたる」だったそうです。懇親会では一変して、終始にこやかに記念撮影に応じる長官を囲み、業種、活動地域の異なる受賞者一同和やかな時を過ごしました。

○節づくし講習会

夏休み、お盆休みの時期にもかかわらず6回の講習会に皆勤が何人も出るほど熱心に受講していただきました。琵琶や鳴物の応援や、歌舞伎座出演中の竹本連中が駆けつけての演奏など、わかりやすい解説と相まって受講者にとって間近で聞く迫力には圧倒されたようです。

国立演芸場
女流義太夫演奏会

年　月　日	曜
17年1月19日	水
2月22日	火
3月24日	木
4月26日	火
5月25日	水
6月28日	火
7月21日	木
8月30日	火
9月28日	水
10月27日	木
11月29日	火
12月19日	月
18年1月19日	木
2月22日	水
3月22日	水

開場　6時
開演　6時半

月により日程が違います。
ご注意下さい。
どうぞよろしく
お願い申し上げます。

これからの予定

一月　三十日　乙女文楽出演　於茅ヶ崎市市民文化会館
二月二十六日　教室ＯＢ演奏会　於東京証券会館ホール
三月　五日　都民におくる邦楽演奏会　於国立劇場小劇場
四月二十三日　一日体験教室　於人形町スタジオ

ぎだゆう座　初春特別公演

一月八日（土）お江戸両国亭（一時開場）
開場時より清酒の振る舞いあり、
一時半過ぎより大相撲触れ太鼓連中実演

番	組
景事	二人禿
相撲甚句	呼び出し三郎他出演
野崎村の段	

〈寄　付〉

波多　一索様（祖先祭に対して）五千円
早川　勉様（〃　〃）一万円
福田　一衛様　一万円
大日本素義会様　三万円

〈訃　報〉

野澤　錦輝（正会員）
平成十六年八月　十日
舘野　善二（推薦会員）
平成十六年九月二十四日

【編集後記】

○このたびは一丸となって力作ができたと思っております。（T）
○きちんと締切りを守る爽快さ！（あ）
○編集部の皆様に助けられました。（T2）
○冬ソナの次は春のワルツ?!今年は平和でオメデタイ毎日が過ごせますように！（ケ）
○力を出し切りました。（K）
○ものすごい量の原稿でした。なす術もなくなかば茫然としておりました…。（K2）
○目まぐるしいスピード……。目がまわる作業でした。（M）
○見台が欲しくなりました。（K3）
○風水に依ると、今年は精神面の強さが求められる年だそう。今年もか…。（S）